

Title	英語対面授業への Moodle 導入の試み
Author(s)	遠藤, 由佳里
Citation	聖学院大学論叢, 第 26 巻第 1 号, 2013.10 : 241-250
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=4587
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

英語対面授業への Moodle 導入の試み

遠藤 由佳里

抄 録

Course Management System (学習管理システム) の1つである Moodle は、遠隔教育の授業支援ツールとして開発され、現在では遠隔教育以外でも広く利用されている。Moodle は社会構築主義の教育理論に基づいており、協同学習をサポートするためのモジュールが備えられている。

外国語の対面授業における Moodle の活用としては、教材の提示、課題の提出、小テスト、協同学習などの実践が報告されている。2013 年度より聖学院大学に Moodle が全学的に導入されたのを機に、筆者は英語クラスで Moodle を取り入れた活動を計画し、その効果と課題を探ることにした。

キーワード； Moodle, 授業支援, 社会構築主義, 協同学習

1. はじめに

Moodle はオープンソースの Course Management System (学習管理システム) の1つである。当初は遠隔教育のツールとして開発されたが、遠隔教育以外での利用も広がり、2013 年 5 月現在、233 か国の 81,319 のサイトでインストールされている⁽¹⁾。日本では 885 の学校やその他の団体、個人のサイトが Moodle に登録されている。聖学院大学では 2013 年度から授業支援サイトとして Moodle が使えるようになった。そこで本稿では、Moodle の教育理論および外国語教育における Moodle の実践例を概観し、筆者の Moodle 導入の試みについて述べる。

2. Moodle の教育理論

Moodle はオンラインの遠隔教育を支援するソフトウェアの開発と研究を行う Martin Dougiamas によって開発され、共同開発者の Peter C. Taylor によるオンライン授業の実践を通して改良が進められた。Dougiamas (2003) は、social constructionism (社会構築主義)、connected knowing (接続理解)、transformative learning (変形学習) の理論の観点から教育におけるインター

ネット利用の有用性を評価している。これらの理論を基にした教授法では、学習者はオンラインの遠隔授業を通して、学習者コミュニティを作り、その中で協同学習を行う。教師は学習者が自身の信条や行動の基準となる考え方を見直し、それに代わるものを模索するのを援助する役割を果たす。

Moodleは遠隔教育においてこの教授法を実践するためのツールとして開発された。基本的には教師が「マイコース」と呼ばれるシラバスのページに「リソース」と「活動」の中からモジュールを追加することにより授業を設計するしくみになっている。「リソース」には文書・音声・映像ファイルをアップロードしたり、ネットのサイトにリンクを張ったりして、学習者に教材を提供するための7種類のモジュールがある。「活動」には「課題」「小テスト」等、教師と学習者間の活動モジュールと、「フォーラム」「チャット」「Wiki」など学習者の協同学習やそれを教師がサポートするためのモジュールが13種類ある。

DougiamasはTaylorが行った授業におけるMoodle活用の効果を協同学習の達成度という観点から評価し、モジュールの改良や追加を行った。例えば「フォーラム」への書き込みへの分析から、学生間の「ダイアログ」よりも学生個人が自分の書き込みに対して考えを深めていく「モノログ」の方が頻繁に行われ、connected knowingの達成度が十分でなかったという結果が得られた。そこでconnected knowingを促すため「フォーラム」に「相互評価」機能を設け、書き込みの内容がconnected knowingかseparate knowingかを互いに評価できるようにした。また、「フォーラム」には他の学生の書き込みに対する返答を促して「ダイアログ」に発展させるモジュールが追加された。

境(2006)が指摘しているように、Moodleを単なる学習者管理システムとしてとらえるのではなく、その根底にある教育理論を踏まえ、各モジュールが設定されている意図を理解しなければならないだろう。

3. 社会構築主義と言語教育

次にMoodleの教育理論の支柱となっている社会構築主義と言語教育の関連について考えてみたい。社会構築主義と関係の深い教育者としてブラジルで識字教育を行ったPaulo Freireが挙げられる。Freireは教師が学習者に知識を授ける従来の教育方法を否定し、学習者自身が変化を生み出す主体であると考えた。そして学習者は互いの対話から学び、教師も学習者から共に学ぶという教授法を開発し、実践した。(Freire, 1988)

FreireのアプローチはアメリカにおけるESL(English as a Second Language)の教授法の1つとして取り入れられた。Wallerstein(1983)はFreireの教育理論を移民の英語教育に応用し、学習者同士および教師と学習者による'dialogue'を学習のプロセスの中心に置いた。Wallersteinはこの'dialogue'を教師がテーマと方向性を決定し学習者が受動的にそれに従うディスカッションと区

別し、学習者自身もテーマを決定に参加する能動的な参加者であり、教師は学習者とともに学ぶ co-learner であると位置づけている。

Wallerstein は移民への英語教育の目的は、彼らが生活に必要な英語力を身につけることだけでなく、彼ら自身が置かれている社会に目を向け行動を起こすことであると考えた。このため 'dialogue' の前に教師が生徒の置かれている状況を観察し、問題を発見するための 'listening' という段階を設けている。そしてそこで発見した問題を教室内で提示するために写真や絵、映画等の教材 ('code' と呼ばれる) を利用した。教師は 'code' について生徒に質問するところから英語での対話を発展させていく。使える英語に限られ、教師と生徒が対等に対話することが困難な初心者レベルの生徒から英語でのコミュニケーションを引き出す手段として、Wallerstein は事物の描写から始め、誘導的な質問を用いる方法を提示している。このように限られた英語力を用いて対話を引き出す方法は日本での EFL (English as a Foreign Language) にも応用が可能であり、Moodle の「リソース」機能を使った教材の提示や「フォーラム」機能を使った対話活動を考えるときの指針にもなると考えられる。

4. 外国語対面授業における Moodle の活用例

Moodle は遠隔授業のためのツールとして開発されたが、対面授業でも広く活用されている。ここでは外国語教育の対面授業における Moodle 活用の実践例からその利用法と利点および問題点を考察する。

4.1 「リソース」の活用

「リソース」モジュールは対面授業のメインとなる教材や、補足資料を提供するために用いられている。熊井 (2006)、品川 (2008) は Moodle から動画サイトにリンクを張り、ニュース映像を使った授業例を紹介している。熊井の例は CALL 教室で授業内にビデオ教材を提示するために利用している。一方、品川はプロジェクター設備のない教室での授業で、学生が各自予習として Moodle で映像を見ることを義務付けている。学習環境は異なっているが、いずれも Moodle の利点として、You Tube などネット上の映像が手軽に利用できるのも、授業内容に合ったタイムリーな教材を提供し、学生の興味・関心を引き付けて学習意欲を高められることを挙げている。

4.2 フォーラムの利用

動画を使った授業では、授業のテーマに関する単語や文型の練習をしたり、内容把握を行ったりした後、テーマについて自分の意見をフォーラムに投稿し、互いの投稿内容を読みコメントをするという活動が行われている。Raimes (1983) はライティングの指導においては、target language を

用いた活動が書き手と読み手双方にとって意味のある活動であるかどうかを考慮しなければならないとしている。自分の書いた内容がフォーラムを通して他の学生に読まれることを意識すること、またコメントを書くために他の学生の投稿文を読むことは真に意味のあるコミュニケーション活動であるといえるだろう。

一方でフォーラムへの投稿が積極的に行われなかった、学生間のやりとりがなかった等の問題点も指摘されている。(境 2006, 滝口・印波, 西納 2006)。この原因として実名で投稿することに対する抵抗があること(境)や、教室内での学習者同士の関係作りができていないこと(西納)が挙げられている。遠隔授業で Moodle を使った Dougiamas は初期の段階で学習者間の協同が十分でないという分析結果を受けて、教師の関与を増やしたり、モジュールの改良を行ったりしており、Moodle の利用がそのまま学習者間の協同につながるものではないことを認識する必要があるだろう。

品川は学期の始めに「参加者」のプロフィール機能を利用し、学生同士が互いの自己紹介を読めるようにして学習者コミュニティ形成を図った。また、手紙文を書くという活動では、フォーラムに投稿された手紙に対して少なくとも2人に対して返事を書くことを義務付けて学生間のコミュニケーションを促進した。この結果、「Moodle での協同学習がクラス内でのコミュニティ形成に大きく貢献した」と報告している。この例はオンラインの活動とオフラインの活動が相乗効果を生み出す可能性を示している。

4.3 課題の提出・小テスト

「フォーラム」を利用した課題提出が学生が互いの提出物を読み合うことを目的としているのに対し、「課題」モジュールを利用した課題提出は教師が学生の提出物を読み、フィードバックをするのに用いられる。滝口・印波はオンライン上で課題の提出とフィードバックを行う利点として、繰り返し詳しいフィードバックが行えることを挙げている。

また、「小テスト」の選択問題を利用した練習問題では、あらかじめ誤答に対する説明を入れることができるので学習効果が期待されることと、問題ごとの正答率が表示されるので、学生が間違えやすい問題についてのフィードバックが容易であるというメリットが指摘されている。一方で、デメリットとしては記述式のテストでは正解・不正解の判断に問題があることが指摘されている。

5. Moodle 導入の試み

筆者は2013年度春学期に人間福祉学部こども心理学科1年(18名)のECA(Reading)IとECA(Cinema)Iの授業で Moodle を試みることにした。このクラスを選んだのはECA(Cinema)Iの授業でPC教室を利用しており、授業内で e-learning システム利用のためのオリエンテーションを

行うことができるからである。

Moodle 導入にあたり、学生のコンピュータ利用状況を調査するアンケートを行った。その結果、全員がこれまでの学校教育の中でコンピュータの使い方を学んだことがあり、学生本人またはその家族がパソコンを所有している割合は90%近かった。一方、その使用頻度は「週に数回」と「月に数回」が約半数ずつを占め、全く使わないという学生もいた。また、その主な利用法は検索や YouTube の視聴で、レポート作成や e メールといった文章入力作業を伴うものは少なかった。学生が日常的にコンピュータを使っているわけではないことがわかったので、今回は Moodle の活動を確認テスト、授業外の課題のための Book Report, 「ライティング」の3種に絞り、まずはコンピュータが学生の学習活動の一部となることを目標とした。

5.1 確認テスト

ECA (Reading) I ではリーディング教材と併せて文法事項を学習しているので、小テスト・モジュールを使って復習のための確認問題を行うことにした。これは学生に学習内容を復習させることと、学生一人ひとりの理解度を把握し、今後の指導に生かすことを目的としている。

小テスト・モジュールでは説明、作文問題、組み合わせ問題、穴埋め問題 (Cloze)、多肢選択問題などの形式の問題を作成することができる。今回は TOEFL や TOEIC などで行われる多肢選択問題を使用した。

小テストを作成するには「マイコース」を編集モードにし、「活動を追加する」から「小テスト」を選び、さらに「多肢選択問題」を選ぶ。ここから問題と選択肢を入力すれば小テストを作成することができる。もう1つの方法として、「問題バンク」に問題を保存しておき、そこから小テストを作成するというやり方もある。これを利用すれば問題の再利用ができる。

「問題バンク」に保存する問題は Microsoft のテキストエディター「メモ帳」を使って GIFT 形式で作成した。(図1)

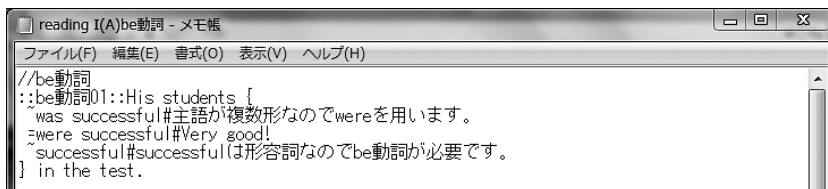
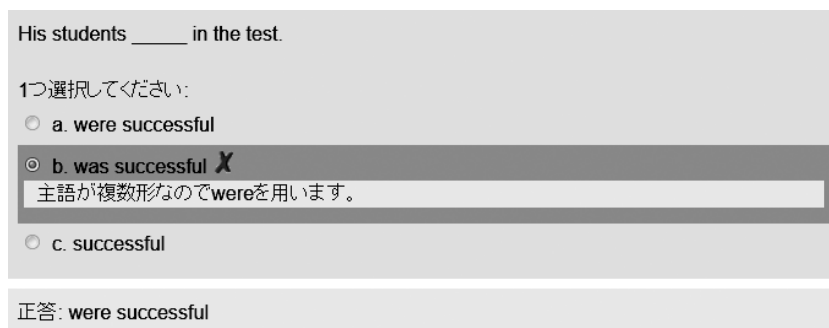


図 1

問題と選択肢が一目で見渡せるので、複数の問題を作成する場合は Moodle 上の画面で作成するよりこの形式の方が便利である。GIFT 形式のファイルを「問題バンク」にインポートしておけば、小テストを作成するときにそこから問題を選ぶことができる。

小テスト・モジュールでは、それぞれの選択肢に対してフィードバックコメントを入れることができる。(図 1 の # の後の部分) これを利用すれば、誤答を選んだ場合、図 2 のようにその理由が示されるので学生の復習に役立つ。



His students _____ in the test.

1つ選択してください:

- a. were successful
- b. was successful X
主語が複数形なのでwereを用います。
- c. successful

正答: were successful

図 2

また、実際にコメントをつけてみると、問題を作る側にもメリットがあることに気が付いた。これまで多肢選択問題を作る場合は学生が間違いやすい点を想定しながら選択肢を作っていたが、1つ1つにコメントを書くことでその問題で確認したいポイントをより明確に意識するようになった。

学生がテストを受験した後は各問の正答率が示されるので、理解ができていない項目については授業で復習したり、新たに復習問題を課したりするなどフォローアップの手助けとなる。

5.2 Book Report

Reading の授業では、授業外の課題として Graded Reader を学期中に 3 冊読み、ブックレポートを提出することを学生に義務付けている。これまでは書名、あらすじ、その本を他の人に薦めたいかどうかとその理由等の項目を設けた用紙に記入して提出させ、これに対してコメントをつけて返していた。

これを Moodle のフォーラム・モジュールを用いて Book Report Share というフォーラムを設けて学生同士が読めるようにした。ここではフォーラム・モジュールの中から「一般的なフォーラム」を選択した。学生が「ディスカッショントピック」として自分が読んだ本のタイトルを記入し、「メッセージ」欄にその本についてのコメントを書くという形で、他の学生はそれを読み、返信することができるようになっている。

学生が互いに書いたものをフォーラムで読むことによって、学生が本を選ぶときの参考にしたたり、

読者を意識したりすることでよりよいレポートを書こうという動機づけになることを期待している。

5.3 ECA (Cinema) I のライティング

ECA (Cinema) I では映画『スクール・オブ・ロック』⁽²⁾ を教材として使用し、リスニング、語彙や会話表現の練習、内容理解を中心に授業を行っている。これに加えてストーリーの中に描かれている夢と現実との葛藤、コンプレックス、親との価値観の違いなど、学生にとって身近なテーマについて意見を述べる活動も取り入れている。これまでは、ワークシートに自分の考えを記入させたり、数人を指名して発表させたりしていたため、全員がお互いの考えを聞いたり、それについて意見を述べる機会がなかった。そこで Moodle のフォーラムのモジュールを用いて全員が互いの書いたものを読めるようにした。

図3は登場人物の表情から気持ちを察する質問とそれに対する学生の書き込みの例である。(学生の氏名・記入時間の部分は削除してある。) この回は学生がそれぞれの意見を書き込んだところで終わったが、今後は他の学生の書き込みに対して返信をさせるように仕向け、学生同士の対話が活発に行われるよう発展させていきたい。

<p>How does Zack feel? <small>2013年05月17日(金曜日) 11:13 - 遠藤 由佳里 の投稿</small></p> <p>Zack's father doesn't want him to play rock music.</p> <p>Does Zack want to play rock music? Or does he prefer to do what his father tells him to do?</p>
<p>I think Zack want to play rock music.</p>
<p>He want to play rock musics.</p> <p>But he want to do what him father said too.</p>

図3

6. 今後の課題

本稿の入稿時点では学期の途中なので、対面授業における Moodle 導入の成果について述べることはできないが、ここまでの課題として授業外での学生のコンピュータ利用が消極的であることが挙げられる。授業中に Moodle を利用した ECA (Cinema) I では、学生同士が教え合いながらコンピュータを操作して課題に取り組んでいたが、授業外で取り組むよう指示した課題については、現在のところ実施率が低い。紙のワークシートによる課題の提出率が非常に高いことを考えると、コンピュータの利用が日常化していないことが原因と考えられる。今後は授業内での Moodle 利用を

続け、学生が互いに書いたものを読み合い、返信を書くことの楽しさを実感し、授業外でも積極的に利用するよう促していきたい。

注

- (1) Moodle Statistics (<https://moodle.org/stat/>) 〈2013.5.12 確認〉
- (2) 『スクール・オブ・ロック』 *School of Rock* パラマウント ジャパン 2003.

参考文献

- 熊井信弘・境一三・西納春雄・安浪誠佑「Moodle を活用した外国語学習支援」『外国語教育メディア学会論文集』2006 pp. 551-562.
- 品川恭子「Moodle を利用した協同学習コミュニティ」『関西外語大学留学生別科 日本語教育論集』18号 2008 pp. 135-150.
- 滝口晴生・印波範幸「Moodle を用いた授業および授業支援の可能性—授業実践を振り返って」(<http://sojo.yamanashi.ac.jp/ipc/bul/final08/moodle/index.html>) 〈2013.5.12 確認〉
- Dougiamas, M & Taylor, P. C.. “Moodle: Using Learning Communities to Create an Open Source Course Management System.” Proceedings of the EDMEDIA 2003 Conference, 2003.
- Freire, P., *Pedagogy of the oppressed*. The Continuum Publishing Company, 1988.
- Moodle (<http://moodle.org/>) 〈2013.5.12 確認〉
- Raimes, A. *Techniques in teaching writing*. Oxford University Press, 1983.
- Wallerstein, N., The Teaching Approach of Paulo Freire. In Oller, J. W. Jr. & Richard-Amato, P. A. (Eds.), *Methods that work*. Newbury House, 1983, pp. 190-206.

(付録)

コンピュータ使用についてのアンケート

1. あなたはパソコンの使い方を学んだことがありますか。また、どのように学びましたか。
 - A. 学んだことがある。
 - a. 小学校
 - b. 中学校
 - c. 高校
 - d. パソコンスクール
 - e. 友人から
 - f. 家族から
 - g. 独学
 - h. その他 _____
 - B. 学んだことがない。
2. あなたはパソコンを持っていますか。
 - a. 自分専用のものを持っている。
 - b. 家族が持っている。
 - c. 持っていない。
3. あなたはどれくらいの頻度でパソコンを使いますか。
 - a. 毎日
 - b. 週に数回
 - c. 月に数回
 - d. 年に数回
 - e. 使わない

4. (3. で e 以外の回答をした人)

あなたはどのような目的でパソコンを使いますか。(複数回答可)

- a. レポート作成 b. ネット検索 c. eメール
- d. フェイスブック, SNS などソーシャルメディア
- e. Skype f. ネットショッピング g. You Tube を見る。
- h. その他 _____

Introducing Moodle to English Classes

Yukari ENDO

Abstract

Moodle, one of various course management systems, has been developed as a tool to support distance learning. With its theoretical background of social constructionism and connected knowing, it emphasizes collaborative learning.

Now a growing number of teachers are using it in various ways. In the teaching of language courses, it is reported that Moodle is useful in grading and giving comments on assignments, giving quizzes, and providing resources such as text files, sound files, video files and URLs. On the other hand, appraisals of the promotion of collaborative learning are mixed.

Since Moodle has become available at Seigakuin University this spring, I plan to try it and see how it will help me conduct my courses and enhance students' learning.

Key words; Moodle, course support, social constructionism, collaborative learning